

地域療育センター実習の学び —実習記録の分析から—

小野 敏子¹⁾ 富岡 晶子²⁾ 前田 留美³⁾

要 旨

本研究は、地域療育センター実習における学生の学びを明らかにする目的で、質的研究法を用いて、実習記録の記述について学びの内容の分析を行った。

その結果、学生の学びは【家族の思いやニーズを理解する】【家族の思いに寄りそう】【家族との信頼関係を形成する】【家族の生活を支援する】【家族を中心に支援する】【子どもの特徴を理解する】【子どもの成長発達を促すよう支援する】【子どもの力を引き出すよう支援する】【家族にとっての療育センターの意味】【保健医療チームによる連携】【地域社会における生活を支援する】など11のカテゴリが形成された。これらの学びは、地域で生活している障害児とその家族の理解を深めるとともに、看護の視点の広がりをもてる機会ともなっていた。また、学びの内容は、地域療育センター実習の目標を達成していた。

キーワード：地域療育センター実習、障害児と家族、学び、小児看護実習

I. はじめに

近年、少子化や入院期間の短縮、小児病棟の閉鎖などから、実習場所の確保は次第に困難になっており小児看護学の実習状況は年々厳しくなっている¹⁾²⁾。限られた実習時間のなかで、小児医療の変化に応じた看護者を育成するための教育を行うにはどのような施設を使い、何を学ぶことができるかを検討することが必要と考える。本学では、開学以来、小児看護実習において病院以外に、地域療育センターで実習を行ってきた。実習後に提出される学生の記録内容をみると、地域療育センター実習で目標としている以上の記述が少なくないと思われたが、これまで学びの内容を明らかにしてこなかった。そこで、平成17年度の本学のカリキュラム改正に伴い、小児看護学実習Ⅱを効果的に展開するための基礎資料としたいと考え、実習記録を分析し、地域療育センターにおける学生の学びを明らかにしたので報告する。

-
- 1) 川崎市立看護短期大学
 - 2) 東京医療保健大学
 - 3) 前川崎市立看護短期大学

II. 研究目的

地域療育センター実習記録の内容を分析することにより、学びの内容を明らかにし、今後の小児看護実習内容、指導方法を検討するための基礎資料とする。

III. 実習背景

小児看護実習は3年次に行われる実習であり、10日間の実習期間に、小児科病棟（5日）、未熟児センター（1日）、小児科外来（1日）、地域療育センター（1日）で実習を展開している。地域療育センター実習は、小児科病棟実習前もしくは後の火曜日から木曜日のいずれかに行っている。その行動目標は「地域療育センターに通園する小児とその家族に対して行われている療育の特徴を説明する」とし、市内3カ所の施設で実習を行っている。実習前オリエンテーションは、教員が「施設の概要」と「障害児の理解」を促す目的で、学内でビデオを使用しながら説明を行っている。地域療育センター側の実習受け入れ窓口は看護師であり、受け持ちクラスの連絡や注意事項など、実習前の教員との打ち合わせ、実習時の受け入れ、施設で行う反省会への参加などの役割を担っている。

学生は、地域療育センターに通園している就園前

の幼児を対象とした早期療育クラスと肢体不自由児や精神発達遅滞児を対象とした幼児療育クラスにはいり、子どもと母親を対象とした療育の実際の見学や、保育士の指導のもと、できるところは関わりながら実習を行っている。実習終了後、施設でカンファレンスを行い学びの整理をしている。カンファレンスには看護師、保育士、教員が参加している。

IV. 研究方法

1. 対象：看護系短期大学3年生、平成17年度小児看護実習終了後の学生63名で、実習終了後に記載した、「地域療育センター実習のまとめ」の記録を分析の対象とした。
2. データ収集期間：平成17年5月～11月
3. データ分析方法：学生の「地域療育センター実習のまとめ」の記録物に記述されている内容を詳細に判読した。学生の記述から「学び」の内容を抽出し、内容の分析を行うために、Berelson,B. の内容分析とその技法³⁾を参考に以下の方法で分析した。
 - 1) 分析手順は、地域療育センター実習の学びの記述内容について表現されている1文章を最小単位として抽出し、この文脈単位をデータとした。
 - 2) 次に、これらを精読して学生の学びに関する記述をコード化し、記述内容の類似性により分類し、その内容を忠実に反映した「サブカテゴリネーム」を命名した。意味内容が把握しにくい文脈については前後の文脈から解釈をした。
 - 3) 「サブカテゴリ」を類似の意味をもつものごとで分類し、その意味を反映した命名をつけ「カテゴリ」とした。
4. 倫理的配慮：研究対象者には研究の意図・結果は研究以外には使用しないこと・個人の特定はしないことを口頭と書面で説明し、協力を求めた。協力が得られた学生からは同意書を受け取った。また、研究協力の依頼は実習評価がすべて終了した時期に行った。
5. 分析の信頼性・妥当性を高めるために、小児看護実習に関わった教員3人で分析作業を行った。

V. 結果及び考察

1. 地域療育センターでの「学び」の内容

学生63名の療育センター実習記録から437の学びの記述を得た。この記述内容を分析した結果、68コード、25サブカテゴリ、11カテゴリが形成された(表1)。

以下、カテゴリを【 】、サブカテゴリを〔 〕、コードを { } として表す。

学びの記述から形成されたカテゴリは、【家族の思いやニーズを理解する】【家族の思いに寄り添う】【家族との信頼関係を形成する】【家族の生活を支援する】【家族を中心に支援する】【子どもの特徴を理解する】【子どもの成長発達を促すよう支援する】【子どもの力を引き出すよう支援する】【家族にとっての療育センターの意味】【保健医療チームによる連携】【地域社会における生活の支援】の11であった。

【家族の思いやニーズを理解する】

この学びの内容は、〔家族の思いの理解〕や〔家族のニーズの理解〕をしたうえで、〔家族の思いを理解して関わる〕ことの必要性を学んでいた。

学生は、{障害児も親にとっては大切な子どもであることに変わらない}という障害児を持つ家族の強い思いを感じると同時に、障害受容の難しさに直面し、{家族の思いを大切にしてお互に関わる}ことや、{障害受容までの家族の葛藤を理解し、支援体制を整える}、{それぞれの家族の背景、考え方を理解し、個性をふまえて援助する}のように、家族の思いやニーズを理解したうえで支援することの大切さを学んでいた。

【家族の思いに寄り添う】

この学びの内容は、〔家族の思いを受け止める〕のサブカテゴリから形成された。学生は、前述した【家族の思いやニーズを理解する】という学びから、さらに、{母親の頑張りを認め、気持ちを理解し、共感する}、{家族の関わりを否定せず、受け止める}のように、家族の考えや行動を認め、否定せず、受け止めることが必要であることを認識していた。

【家族との信頼関係を形成する】

この学びの内容は、〔子どもや家族との関わりの中から信頼関係が形成される〕のサブカテゴリから形成された。{母親の気持ちを受け止め、コミュニケーションをはかることで信頼関係が形成される}、

表1 「学び」の内容

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
家族の思いやニーズを理解する	家族の思いの理解	障害児も親にとっては大切な子どもであることに変わらない
		障害受容の難しさと母親の思いや強さを考えた
	家族の思いを理解して関わる	家族の思いを大切にしておく
		障害受容までの家族の葛藤を理解し、支援体制を整える
		家族の思いを理解して助言する
		それぞれの家族の背景、考え方を理解し、個性をふまえて援助する
		家族の思いを完全に理解できないことを自覚する
	家族のニーズの理解	対象のニーズを意図的に引き出し、理解する
		家族のニーズに応える
家族の思いに寄り添う	家族の思いを受け止める	母親の頑張りを認め、気持ちを理解し、共感する
		家族の関わりを否定せず、受け止める
家族との信頼関係を形成する	子どもや家族とのかかわりの中から信頼関係が形成される	母親の気持ちを受け止め、コミュニケーションをはかることで信頼関係が形成される
		母親の子どもへの愛情を理解し、専門職者も愛情をもって子どもに接することで信頼関係が形成される
家族の生活を支援する	家族がよりよく子どもとかわれるように支援する	家族が安心して楽しみながら育児できるように支援する
		家族が子どもをより理解できるように支援する
		家族が子どもにより良い関わりができるように支援する
		家族を支援することが子どものケアにつながる
	家族が前向きに生活できるように支援する	子どもだけでなく、子どもと過ごす家族を支援することが必要
		家族が障害を受容し、前向きに育児できるように支援する
		親の不安を軽減し、意欲や自信を高めるように支援する
	子どもの療育に必要な知識や方法を指導する	家族が育児に必要な力を身につけられるように支援する
		子どもへの援助方法を親に伝えることも援助である
		療育を通して家族が子どもとの関わり方や家庭での生活に役立つ方法を学ぶことができる
		センターは障害に関する知識を提供する場でもある
家族を中心に支援する	家族全体を支援する	家族全体を一つの単位としてとらえる
	家族を主体とし、共に考える	家族が主体となるように援助する
		家族と共に考える姿勢で援助する
子どもの特徴を理解する	障害児の理解	障害があっても、子どもはさまざまな反応を示している
		実際に子どもと関わることで障害について理解できた
		子どもへの声かけの仕方が理解できた
		障害を持っても同じ子どもであり、障害を個性としてとらえて接する
	子どもの個性を理解して関わる	一人ひとりの子どもの障害や発達段階を理解して関わる必要がある
子どもの成長発達を促すよう支援する	療育を通して成長発達を促す	療育を通じて子どもの発達が促される
		療育を通じて日常生活の自立が促される
		母子関係や周囲の人々の関わりが子どもの成長発達に影響する
	楽しみながら成長発達を促す	遊びを通して子どもとの関係を形成する
		子どもは遊びを通して、楽しみながら成長発達する
	安全で安心できる環境を整える	子どもにとってより良い環境を提供する
		安全に配慮し子どもが安心して過ごせるように支援する

子どもの力を引き出すよう支援する	子どもが前向きに療育を受けられるよう支援する	子どもが主体的に療育を受けられるように支援する 楽しみながら療育することで意欲的に取り組むことができる
	子どもの力を引き出すように支援する	子どもの持っている力を最大限に引き出すように援助する
家族にとっての療育センターの意味	母親同士の交流が心の支えになる	母親同士の情報交換や悩みを相談できる場である 家族にとって共感者の存在が支えになる
		ピアサポートにより母親のストレスが緩和される ピアサポートにより母親の不安が軽減される
	母親同士が支えあう場	療育センターの役割は障害があるかもしれない児と家族にとって安心できる場所である きょうだいを預けることで家族が安心して子どもと関われる 子どもが療育を受けている間、母親が休息をとれる 専門職に相談できる場である
	家族が安心できる場	看護専門職としての役割について理解できた 保健医療チームのメンバーについて理解できた 看護師以外の保健医療チームメンバーの具体的な役割が理解できた 看護師は子どもの健康管理と母親の支援を行っている 看護師は他職種と連絡調整を行い、連携を図っている
		ボランティアは家族が安心して障害児と関われるよう支えている 様々な職種とボランティアが多方面から子どもと家族に関わっている 保健医療チームが連携し、個別性に応じた支援を行う 様々な専門職がそれぞれの視点で見ることによって小児と家族にあった支援ができる チームで療育を行っていくためには情報交換が重要である 様々な専門職がカンファレンスを行い、必要な支援の方向性を話し合っている 様々な専門職が子どもの療育の計画立案、実施に関わっている
保健医療チームによる連携	専門職の役割の理解	
	チームアプローチによる実践	
地域社会における生活を支援する	地域の専門職との連携	センター内だけでなく様々な専門職が地域で連携をしている 子どもと家族が地域社会で安心して暮らすために、地域の連携や社会の理解が必要である
	地域との橋渡しを行う	障害児の就学支援を行っている 障害児と家族を地域で支援する一環として啓蒙活動を行っている
	継続的に支援する	家族だけで対処することは負担が大きい 将来を見越して、継続的に支援する

{母親の子どもへの愛情を理解し、専門職者も愛情をもって子どもに接することで信頼関係が形成される} のように、専門職者として家族と信頼関係を形成していくためには、家族の気持ちを受け止めてコミュニケーションをはかることが必要であることや、子どもへの接し方が家族との信頼関係に影響することを学んでいた。

【家族の生活を支援する】

この学びの内容は、[家族がよりよく子どもと関

われるように支援する]、[家族が前向きに生活できるように支援する]、[子どもの療育に必要な知識や方法を指導する] の3つのサブカテゴリから形成され、実際の療育における家族への支援の方法、態度に関する学びがあった。家族がよりよく子どもと関わるためには、{家族が安心して楽しみながら育児できるように支援する} や、{家族が子どもをより理解できるよう支援する} が必要であり、{家族を支援することが子どものケアにつながる} と認識することができていた。また、{家族が障害を受

容し、前向きに育児できるように支援する} や、{親の不安を軽減し、意欲や自信を高めるように支援する} ことで、障害受容の難しさを感じながらも、家族が前向きになれるよう専門職者としての支援の必要性を理解していた。

具体的な支援方法としては、{子どもへの援助方法を親に伝えることも援助である}、{センターは障害に関する知識を提供する場でもある}のように、家族への教育指導の方法を理解するとともに、{療育を通して家族が子どもの関わり方や家庭での生活に役立つ方法を学ぶことができる} のように、実際に療育での専門職の関わりを家族に示すことが家族の支援に結びついていると考えることができていた。

【家族を中心に支援する】

この学びの内容は、[家族全体を支援する]、[家族を主体とし、共に考える]のサブカテゴリから形成され、{家族全体を一つの単位としてとらえる}、{家族が主体となるように援助する}、{家族と共に考える姿勢で援助する} のように、一方的な支援ではなく、主体は家族であり、家族全体がケアの対象であること、家族と共に考えることが家族の支援に結びつくとして理解することができていた。

【子どもの特徴を理解する】

この学びの内容は、[障害児の理解]、[子どもの個性を理解して関わる]の2つのサブカテゴリから形成された。

[障害児の理解]では、{障害があっても、子どもはさまざまな反応を示している}、{実際に子どもと関わることで障害について理解できた} のように、実習で子どもと関わることで障害児に対する理解を深めることができ、{障害を持っても同じ子どもであり、障害を個性としてとらえて接する} ことが大切であると気づき、{ひとり一人の子どもの障害や発達段階を理解して関わる必要がある} であると考え、障害をひとくくりではなく、ひとり一人の個性を理解することの必要性を学ぶことができていた。

【子どもの成長発達を促すよう支援する】

この学びの内容は、[療育を通して成長発達を促す]、[楽しみながら成長発達を促す]ことが大切であり、そのために[安全で安心できる環境を整える]

が必要であるという学びのサブカテゴリから形成され、実際の療育場面に参加することで、子どもの成長発達の支援のあり方を学んでいた。

{療育を通じて日常生活の自立が促される}、{母子関係や周囲の人々の関わりが子どもの成長発達に影響する} のように、療育の中で自立や社会性の発達が促進されていることや、{子どもは遊びを通して、楽しみながら成長発達する} のように、子どもの成長発達に遊びが不可欠であることを再認識する機会となっていた。また、子どもの成長発達を促すために、{子どもにとってより良い環境を提供する}、{安全に配慮し子どもが安心して過ごせるように支援する} が必要であると理解できていた。

【子どもの力を引き出すよう支援する】

この学びの内容は、[子どもが前向きに療育を受けられるよう支援する]、[子どもの力を引き出すよう支援する]のサブカテゴリから形成された。

{子どもが主体的に療育を受けられるように支援する}、{楽しみながら療育することで意欲的に取り組むことができる} のように、子ども自身が療育を楽しく感じることができ、療育に積極的に参加できるようにプログラムの検討や関わりが必要であると理解していた。また、{子どもの持っている力を最大限に引き出すように援助する} ことが重要であると認識していた。

【家族にとっての療育センターの意味】

この学びの内容は、[母親同士の交流が心の支えになる]、療育センターが[母親同士が支えあう場]であり、[家族が安心できる場]であるの3つのサブカテゴリから形成された。センターは、子どもの療育を行う場としてだけの機能ではなく、母子通園により母親が子どもと一緒に参加することで、同じ悩みを持つ母親同士が交流でき、{母親同士の情報交換や悩みを相談できる場である}、{家族にとって共感者の存在が支えになる}、{ピアサポートにより母親のストレスが緩和される} と認識していた。

また、家族にとっては、療育中にボランティアがきょうだいを見ていてくれることで安心できたり、母子分離のプログラムではひとときでも母親が子どもと離れ、休息をとることができる機会となると捉えていた。

【保健医療チームによる連携】

この学びの内容は、〔専門職の役割の理解〕と、〔チームアプローチによる実践〕のサブカテゴリから形成された。看護専門職の役割には、{看護師は子どもの健康管理と母親の支援を行っている}、{看護師は他職種と連絡調整を行い、連携を図っている}があると学び、そのほか、保健医療チームのメンバーとその役割についても理解を深めることができていた。

また、{様々な職種とボランティアが多方面から子どもと家族に関わっている}、{保健医療チームが連携し、個別性に応じた支援を行う}のように〔チームアプローチによる実践〕を学び、さらに {チームで療育を行っていくためには情報交換が必要である}、{様々な専門職が子どもの療育の計画立案、実施に関わっている}のように、具体的なアプローチの方法を理解することができていた。

【地域社会における生活を支援する】

この学びの内容は、〔地域の専門職との連携〕、〔地域との橋渡しを行う〕、〔継続的に支援する〕の3つのサブカテゴリから形成された。

療育センター内でのチームアプローチに加え、{センター内だけでなくさまざまな専門職が地域で連携している}ことや、{子どもと家族が地域社会で安心して暮らすために、地域の連携や社会の理解が必要である}と理解することができていた。また、センターが {障害児の就学支援を行っている}ことや、{障害児と家族を地域で支援する一環として啓蒙活動を行っている}ことを知り、〔地域との橋渡しを行う〕役割を担っていることを学んでいた。さらに、今後の子どもの成長発達と家族の生活を見据え、{家族だけで対処することは負担が大きい}ため、{将来を見越して、継続的に支援する}ことの必要性を認識していた。

本研究において形成されたカテゴリと学びの内容から、学生は地域で生活している障害児とその家族と出会うことで、障害児とその家族の理解が深められていた。また、障害児や家族への看護とは何か、地域での生活を支えるための支援とは何かを考えることで、看護の視点の広がりがもてる機会となっていた。

2. 学びと実習目標との関連

1 により得られた療育センターでの学びの内

容と、小児看護実習目標との相応について検討した。小児看護実習目標の中での療育センター実習の位置づけは、実習目標4の「健康障害をもつ小児を取り巻く保健医療チーム及び、福祉・教育を理解する」の項目に対応し、行動目標においては、7の「地域療育センターに通所する小児とその家族に対して行われている療育の特徴を説明する」、1) 地域療育センターに通所する小児の特徴を説明できる、2) 療育を受けている小児とその家族の反応を知り、必要なケアを理解する、3) 小児と家族に関わる保健医療チームのメンバー及び福祉・教育の実際の関わりを説明できると設定している。

1) 地域療育センターに通所する小児の特徴について

カテゴリ【子どもの特徴を理解する】は、〔障害児の理解〕のサブカテゴリが含まれ、{障害があっても子どもはさまざまな反応を示している}、{実際に子どもと関わることで障害について理解できた}などから形成され、障害のある子どもと関わる機会は学生の貴重な学習の機会となっており、地域療育センターに通所する小児の特徴を理解することができていたと考える。

2) 療育を受けている小児とその家族の反応と必要なケアについて

カテゴリ【家族の思いやニーズを理解する】【家族の思いに寄り添う】【家族との信頼関係を形成する】【家族の生活を支援する】【家族を中心に支援する】【子どもの成長発達を促すよう支援する】【子どもの力を引き出すよう支援する】の7つのカテゴリでは、療育を受けている家族の反応をとらえ、支援の必要性を認識し、具体的な支援方法を見学を通して学ぶことができていた。また、子どもへの関わりにおいても、療育を通して成長発達を促すことの重要性と、具体的な療育の取り組み、子どもへの接し方を学ぶことができていた。そのため、実習目標は十分に達成することができていたと考える。

3) 小児と家族に関わる保健医療チームのメンバー及び福祉・教育の実際の関わりについて

カテゴリ【家族にとっての療育センターの意

味】【保健医療チームによる連携】【地域社会における生活の支援】の3つのカテゴリでは、療育センターにおいてさまざまな職種が子どもと家族に関わっている実際を見学することができ、看護専門職としての役割と、他職種の役割を理解することができ、それぞれの専門職が専門性を発揮して連携することの大切さを認識することができていた。また、家族にとって専門職だけではなく同じような立場にある家族と交流できることの意味を知り、学生が家族支援のあり方を深く考える機会となっていた。さらに、センター内にとどまらず、地域社会で生活している子どもと家族であることを理解し、地域の中で継続的に支援していく必要性和その方法を考えることができていた。

上記のように、本研究の学びを地域療育センター実習の目標との関連性でみたところ学びの内容は地域療育センター実習の目標をほぼ網羅していると考ええる。

また、行動目標2)の学びは、小児看護実習目標3「小児の健康障害が家族に及ぼす影響を理解し、小児と家族に対する看護を計画・実施・評価する」の行動目標3「小児の健康障害が家族に及ぼす影響を把握し査定する」の目標達成にも役立っているといえる。実習目標3は小児病棟実習で学んでほしい目標として設定している。小児看護の対象は小児だけでなく家族も含めるため、学生には、家族にも目をむけてほしいと考えている。しかし、小児病棟実習では、家族との面会時間が夕方からのため、実習時間中に家族と関わる機会が持ちにくいことや、短期間で看護過程の展開をしなければならないという学生の負担感もあり、達成されにくい目標となっている。地域療育センターは、母子通園を原則としているため、学生は、小児と家族がいっしょにいる療育の場をみることができる。また、学生は、直接家族と関わるという負担感を持たずに、保育士の関わりを見ることができることから、家族の思いやニーズの理解、家族への支援の方法など、家族の看護について学べる場となっていると考える。また、実習終了後に各施設でカンファレンスを行い、学生が見学した内容について共有し、教員や指導者が意味づけし、学びの整理をしていることも、多くの

学びが得られた要因のひとつになっていると考える。カンファレンスには、看護師だけでなく、実際にクラスで子ども達の療育に関わっている保育士も参加してくれる。異なった専門分野の指導者が、それぞれの視点からコメントをしてくれることが、学生の看護の視野の広がりにつながっていると考える。更に、カンファレンスの場では、学生の緊張をほぐし、発言しやすい雰囲気作りをしてくれている。学生は、疑問に思ったことや感じたことをすなおに表現できたことも、学びを深めることにつながっていると

VI. 結論

1. 地域療育センター実習まとめの記録から学びの内容を分析した結果、学生の学びは11のカテゴリが形成された。
2. 11のカテゴリと学びの内容は、地域療育センター実習の目的を網羅していることから地域療育センター実習の目標を達成した学びをしているといえる。また、小児看護実習目標3の「小児の健康障害が家族に及ぼす影響を理解した看護」の目標達成に関わる学びもしていた。
3. 形成されたカテゴリと学びの内容から、学生は、障害児とその家族の支援について理解を深めるとともに、家族や家庭、社会との関連など、看護の視点の広がりをもてる機会になっていた。

VII. おわりに

本学では、開学以来、小児看護実習の施設として地域療育センターで実習を行ってきた。本研究において、地域療育センター実習における学びの内容を明らかにし、まとめたことで、これまで行ってきた実習の評価をすることができた。その結果、地域療育センターは、小児看護実習の場として、意義ある施設といえることがわかった。また、1日の見学で、多くの学びが得られている背景には、学生の緊張をほぐし、学びやすい環境作りをしてくれているセンター職員の関わりが大きいこともわかった。

今後も教育的意図を明確にし、短期間の実習が効果的に行われるように考え、貴重な実習施設として継続したいと考える。

引用文献

- 1) 安田恵美子・飯村直子・江本リナ他：文献からみる小児看護学実習の現状と今後の課題．日本小児看護学会誌 Vol. 8, No2, 1999, 66-72.
- 2) 飯村直子・伊藤久美・江本リナ他：看護系大学における小児看護学実習の概要．日本小児看護学会誌 Vol. 10, No2, 2001, 6- 21.
- 3) 舟島なをみ．質的研究への挑戦．第1版 東京：医学書院，2001, 42-45.